

## 講演概要

### 認知症になってもその人らしく生きる社会を目指して

恩蔵 絢子（脳科学者/東京大学大学院総合文化研究科特任研究員）

「認知症はどうしたらならないでいられるのか」と悩んでいる人も多いかもしれません。これまで認知症に関しては、認知症にならないようにするために予防・治療に焦点が当てられてきました。しかし、私は「認知症はどうしたら受け入れられるのか」という視点もとても大事だと思っています。認知症になっても、また、認知症が進行しても、脳の認知能力がゼロになってしまうなどということはないのです。認知症が重度になったときでもどれほどの能力や感情が残るのかをお話し、その人に残る能力や感情を最大限に引き出すような関わり方を一緒に考えたいとおもいました。

アルツハイマー型認知症では、初期には海馬（かいば）と呼ばれる記憶の中樞が、少しだけ萎縮することが知られています。海馬は、新しい出来事の記憶を作る場所ですので、海馬が萎縮すると、今見ているものや今聞いたことを覚えておくこと、すなわち「今、誰と、どこにいるか」という記憶を作ることが苦手になります。しかし、たとえ海馬を手術で全部取ってしまっても、昔の記憶は無事に残っていることが知られています。今のことが覚えにくくなるだけで、既に作っていた記憶は問題がないのです。

また、もちろん脳にはさまざまな部位があります。例えば、大脳基底核（だいのうきていかく）や小脳（しょうのう）は、アルツハイマー型認知症では進行しても萎縮しにくい部位だと言われています。脳部位が認知症によって全部影響を受け、一直線に能力が衰えていくということではなく、影響を受けにくい部位もあるのです。そして、この大脳基底核や小脳は、運動の記憶を司っています。自転車の乗り方、包丁やカンナの使い方など、体を繰り返して使って覚える記憶のことです。すなわち、認知症でいままで得意だった料理をしなくなっていると、それは、もしかしたら海馬のちょっとした萎縮のせいで、「今何を作ろうとしていたか」が思い出せなくて、例えば、大根を切っている途中でどうしたらいいのか途方に暮れてしまっているだけで、料理の技術は脳から消えていないのかもしれませんが。台所で横に見てくれている人がいて、「あ、いま大根の味噌汁を作ろうとしているんだよ」と、思い出させてくれれば、「あ、そうか、そうか」と料理をまた再開できることがあるのです。

海馬が少し萎縮することによって、海馬の隣にある感情の中樞・扁桃体（へんとうたい）も、海馬の機能を補おうとがんばることが知られています。認知症によって高まる能力もあり、それが感情なのです。そして亡くなるまで持っている感情に、「人の役に立ちたい」という人間らしい感情があります。

認知症によって、少しずつ衰える機能は確かにありますが、残り続ける能力、そして感情があるということを知ってほしいです。